

## 世界の日本人ボランティア②

文＝渡邊 裕子 写真＝池谷 香

## 「始めてみよう! NYでボランティア」

5月のある土曜早朝、マンハッタンから地下鉄を乗り継いだブルックリンの駅に、眠そうな顔をした日本人が続々と降り立った。1人で来た学生風の若い男性もいれば、夫婦連れも、アメリカ人のボーイフレンドを連れて日本人の女の子もいる。それら数十人の人々は、駅の近くにある、何の特徴もない、名前の表記もない建物に次々と入っていく。昼には、そろいのTシャツを着た彼らが路上にずらっと座り込んでお弁当を食べる光景が見られた。車で通り過ぎる人々も、近所の人たちも「ここで何してんの? このアジア人たち」と思ったに違いない。無理もない。日ごろなら日本人が通ることもほとんどないような通りなのだ、そこは。



天気の良い土曜の朝、ブルックリンの寂れた駅に突然現れた、これらの怪しい日本人たちは何をしていたか。答えは、ボランティアである。この建物は、家族連れのホームレスが住むシェルターであり、私も含め、数十人の日本人たちは、その日1日そこでペンキ塗りに動んだボランティアだった。このような日本人ボランティア集団の活動をニューヨークで随時仕掛けているのが、ニューヨーク州認可の非営利団体NY deVolunteer Inc. (ニューヨークでボランティア。www.nydevolunteer.org)。それをとりまとめるのは、発起人であり代表を務める日野紀子さんである。

日野さんが2002年に仲間と共に立ち上げたNY de Volunteer Inc. は、「ボランティアをやってみたくけれど、最初の1歩を踏み出せずにいる人や、仲間を探している人と一緒に、ニューヨークで気軽にできるボランティア機会を発掘、企画したり、情報交換をするボランティア・コミュニティー」という謳い文句で、過去2年間、地道にネットワークを広げ、ボランティア推進活動を展開してきた。キャッチフレーズは、ズバリ「始めてみよう! NYでボランティア」。

ご存知の通り、アメリカは、しばしば「ボランティアの国」と呼ばれる。実際、この国では、小さな子供からお年寄まで、あらゆる立場の人々が、自らの興味や特技を活かし、無償で地域に貢献することが広く社会に浸透している。進学や就職の際に提出する履歴書には、平均的なアメリカ人であればほとんど例外なくボランティアの経験を書き連ねているものだし、ボランティアの協力なしには運営不可能なNGOやNPOも数多い。

「アメリカに住むからには、自分もボランティア活動を通して地域社会に貢献してみたい」と思う外国人は少なくないだろう。確かに、地域文化を知り、その社会の一員として溶け込み、同じコミュニティーに住む仲間と深く関わるために、ボランティアほど有効な入り口はない。ただ、言語能力に限界があり、特別な能力も資格も持たない多くの外国人にとって、1人でボランテ



日野紀子さん。同志たちと共に非営利団体「NY de Volunteer」を設立し、1人でも多くの人にボランティア活動の喜びを知ってもらいたい一心で活動を続けている

ィアの機会を探し、地域社会に乗り込んでいくのは、言うほど簡単なことではない。NY de Volunteer は、そのように、「ボランティアをやってみたくけれど、具体的に何をしたいかわからない」という日本人たちに、初めの1歩を踏み出す手伝いをする団体である。

「同じ目線で助け合う心を持つ人々の輪を広げたい」

発起人の日野紀子さんは、1967年生まれ、1993年に渡米した。ニューヨークに来てすぐ、かねてから憧れていたコニーアイランドを訪れる。そこで目にしたのは、映画や写真で見ていた憧れの地とは程遠い、ゴミに埋もれた海岸だった。日野さんは、その光景にショックを受けながらも、反射的にゴミ拾いを始める。「そんなもの集めてもお金にはならないよ」とからかう若者を無視してゴミ拾いを続け、しばらくしてふと目を上げると、少し離れたところで同じようにゴミを拾い始めた中年の女性と目が合った。その体験が、ボランティアを始めるきっかけになったという。しかし、その後、ウェブサイトのデザインの仕事に就いた彼女は、しばらくはボランティアと無縁の生活を送ることになる。2002年、

## PROFILE

渡邊裕子 (わたなべゆうこ)。1970年生まれ。神奈川県逗子市出身。1993年、早稲田大学法学部卒業後、マサチューセッツ州立大学アムハースト校大学院にて政治科学を専攻し、1995年修士号取得。修士論文の論題は、「表現の自由：日米最高裁における猥褻文書取締りの比較」。1996年8月より、ニューヨーク・マンハッタン・ジャパン・ソサエティー (www.japansociety.org) に勤務。日米の研究者、芸術家、政財界人、建築家、作家、詩人、デザイナー、ジャーナリストなど各界の専門家を講師に迎え、年間約60回にのぼる講演会の立案・運営を担当する。朝日新聞ウェブサイトの「Japanを売る」に毎月コラムを掲載中



家族連れのホームレスが暮らすシェルターのペンキ塗りに動しむ

各プロジェクトには、日野さんが、スタッフを責任者として割り当て、そのプロジェクト・リーダーたちが、プロジェクトの告知、参加者募集、スケジュールおよび連絡事項の伝達、現場での指揮監督、プログラム終了後の報告までを責任を持って行うというシステムを取る。それらのスタッフたちもまた無給のボランティアなのだが、日野さんのビジョンと情熱に共感し、共に頑張ろうとする熱意が伺われる。そして、気の合った仲間同士が楽しくやっているクラブ活動のような雰囲気を持ちながらも、その仕事ぶりは非常に高いプロフェッショナル意識に支えられている。そして、実際の活動の現場においては、どのスタッフも、参加ボランティア1人ひとりに対し、こまめに声をかけ、取り残される人が出ないように、常に気を配る。それは、日野さんがスタッフの教育に際して徹底的に強調している一点なのだという。なぜなら、「うちのよな団体は、来てくれた人が楽しかった、気持ちよかった、また来ようと感じてくれることが一番大切だから」。

発足からわずか2年、NY de Volunteerの活動は、ニューヨークの日本語メディアでも頻繁に紹介され、その知名度は順調に上がっている。ただ、組織運営面での向上、特に資金調達やスタッフ確保の問題は、日野さんにとって常に大きな課題である。そしてもっと大きな夢もある。これまでのノウハウを応用し、「東京でボランティア」など世界各地でよりよい地域社会づくりに貢献していくこと、ボランティア・コーディネーター育成プログラムによって次世代のリーダーを育てること。

「なぜ今の仕事を?」という話の中で、明るく快活な彼女がポロッと言った印象的な言葉があった:「私は、人の心の中にある寂しさを、少しでも少なくするようなことがしたい」。ニューヨークという競争の激しい街は、ともすると人を孤独に陥れやすい場所である。ボランティア活動は、殺伐とした都会の生活の中で、参加する者に人との繋がりを感じさせ、人の優しさに気付かせる。この街で日野さんができることは、まだまだたくさんありそうだ。

初めて参加した公園美化活動ボランティアで、40人の参加者をコーディネートする機会があった。この体験で、再びボランティア活動の喜びに目覚めた日野さんは、同志たちと共に非営利団体NY de Volunteerを設立、2003年1月に法人化する。

オフィスを持たないNY de Volunteerは、事実上、日野さんの自宅を事務所代わりに、それでも精力的に活動を行っている。手がけるプロジェクトは多彩だが、そのほとんどは、特別な能力や資格がない人でも気軽に参加できるものである。「ホームレス・シェルターでのスープ配膳」「ハーレムで日本語を教える」「高齢者向けホームでのボランティア」「公園美化」「虐待された経験を持つ児童の更正施設で子供たちと土仕事を一緒にしたり、折り紙などを教えるボランティア」「飲み物を片手に集う情報交換と交流の場“Cafe de Volunteer”」など。これらの活動に関する予告、情報伝達は、専らEメールのメーリング・リストを通じ、活発に行う。あくまでも、参加者が自分の関心に応じ、好きな時に好きなだけ自由に参加できる気軽なものであること、そして、参加する本人が気負いなく「楽しい」と感じられるものであることを大切にしている。